

とつと通信は平川の分身がお客様のご挨拶に伺う。という気持ちでお届けしています。当然ですが無料です。

とつと通信

2025年3月26日発行

264号

「とつと通信」は
略して「とつと」。
いつも読んでいただき
ありがとうございます。

こんにちは！平川です。日ごとに春めいてきました。いかがお過ごしでしょうか。さて子供って想像もつかないことをします。親から見たら「大丈夫かいな、この子は」みたいな。今回もしや、もない誰です。今月もはりきっていきましょう。

あん頃のぼくらはアホやった3パート

私は小学生の頃、自分でも押さえが効かないくらい、おしゃべりで落ち着きのない子でした。授業中もじっとしていられたかった。さてうちのクラスは、新学期にな

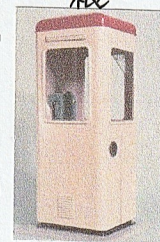


るたびに席替えがあった。座る場所はクジ引きだった。好きな子のところに座りたい男子にとって一大イベントだった。ところが先生は、いつも私だけ引かせてくれない。なぜなら私の席は教壇の真ん前と決まっていたから。いつでも定規で叩ける範囲にいなさい。との理由から。そんなせつしょうな。今思えば笑える誰である。その頃、ある遊びが大流行した。当時、給食に出る牛乳はビンタイプでな



ぜかそのフタを集めるのが流行った。ルールは5、6人でフタを表にして重ね、ジャンケンで勝った順に、指の爪でフタの端をはじき、裏返った分をもらえろ。という単純な遊び。昼休みには、多くの男子が教室の片隅でやっていた。私はその牛乳のフタを、大きなダンボール箱いっぱいにつめていた。学校で一番だったと思う。宝物だった。ところが、4年生の3学期、親の仕事の関係で佐世保市から福岡市へ転校することになる。さすがにフタは持って行けない。どうしようかと悩んだあげく、みんなにあげることにした。置き土産のつもりだったのだろう。さてどうやって配ろうか。いいことを思いついた。放課後、クラスのみんなに運動場へ出てきてもらい、私は校舎の屋上へ上がった。そして「フタをあげるよ」と、花咲かじいさんのように、すべてつかんでばらまいた。何ヶ枚とビラビラ落ちていった。すると何事かと降ってきたフタに気づいた先生が、屋上へあ

わててやってきた。私はこっぴどく怒られ、散らかったフタを一人で拾わされた。宝物はすべて焼却炉行きとなった。他にもこんな遊びが流行った。煙幕という花火をご存知でしょうか。直径3センチ程度の玉に導火線がついていて、火をつけるとモクモク煙が出る。ただそれだけの花火である。昭和45年頃の電話ボックスは、クリーム色に赤い屋根で、取っ手に直径10センチ程度の丸い穴があった。私は電話ボックスへ入り、友達に穴から煙幕を入れてもらう。たちまち煙が充満し、真っ白で何も見えなくなる。穴に口をあて、ハアハアと空気を吸い耐えしのぐ。耐える時間が長いほど根性があるヤツと認められる。という何ともアホな遊びだった。髪のもや服に煙の臭いが染み付き、よく母に怒られた。またロケット花火でもよく遊んだ。二つのチームに分かれ、コカ・コーラのビンにロケット花火をさし、相手めがけて打ち合う。体を守るため、ダンボールで鎧を作ったが、動きが鈍くなりよけいに狙われた。



ある日の夕方、友達7、8人で遊んでいた時、私は何を思ったのか、今から職員室を攻撃しに行こうと言いだす。まったくあきれた子供である。小学2年生の妹もいて、わけも分からずついてきた。薄暗くなった小学校へ行き、まずは逃げる場所を裏山と決めた。横一列になり、ほふく前進で近づくと5、6人の先生が仕事をしているのが見えた。私たちはいっせいに火をつけ、職員室めがけ飛ばした。弧を描いたロケット花火は、窓ガラスにコツンと弱々しく当たった。気づいた先生が「こらー、誰だ」と叫びながらこっちへ走ってきた。「うあー、逃げろ」今にも泣き出しそうな妹の手を引いて、一目散に真っ暗な裏山へ逃げた。暗くて山道が見えず、10メートル下を流れる川へ落ちそうになる。どうにか逃げ切ったが、あの時は本当に怖かった。あれから50年がたつ。お正月に親戚が集まると、妹が「あの時は怖かった、ホントお兄ちゃんたちアホや」と思ったと今でも通の着に盛り上がる。つづく

発行／有限会社アサム 平川雅樹
〒819-1127 福岡県糸島市有田中央 2-14-36
☎092-321-4001 ✉hirakawa@asam.jp

・伊都倫理法人会ブログ : <https://itorinri.com/>

ご感想や楽しいメッセージをお待ちしています。大変打ちにくいので批判はご遠慮下さいませ(笑)